し加筆修正され、成果のみのった論文集ができたという。

編者は「その共同研究で私は、学際的な女性学研究の理想像を目のあたりにしたように思う」と語っている。私達は日頃、看護婦問題の女性学検討の必要性を痛感しながら果せないで来た。その重要点を先ず序論が展開している。即ち看護は女性一般のメタファとして今日も存在している。看護の歴史の中にみられる女性観の反映としての矛盾にみちた看護婦の肯定的否定的イメージは、ケアの社会的価値の正当視が確立すること無しには消失しないこと。女性、女性労働、看護、の地位はこれまでもこれからも相互関連していると述べられている。

本文内容は、十編の論文が大きく三つに分けて構成されている。「第Ⅰ部・視覚芸術におけるイメージ」には、①フローレンス・ナイチンゲール以前（絵画・彫刻）。②イメージか現実か（写真）。③象徴としての建築。「第Ⅱ部・文学のなかのイメージ」。④フィクションと大衆文化に見る看護婦のイメージ。⑤看護婦。⑥「特殊な関係」。⑦生命の信奉者たち。「第Ⅲ部・社会問題とイメージ。」⑧ワシのように舞い上がれ（黒人看護婦をめぐる歴史イメージ）。⑨イメージと理想（看護の社会化と性差別）。⑩白衣の天使（ハリウッド映画でのナイチンゲール像）。となっている。

私達は看護史研究会というささやかなサークルで、やはり七年の年月をかけた共同討論により、「看護学生のための世界看護史」を一九九七年三月にやっと刊行した。その立場からは、やはり文化財で看護の歴史を立証する第Ⅰ部が一番ひきつけられた。古代では少ない史料であまりの断定ぶりに驚きつつも、私事としての看護が時代と共に社会的要求により公事としての看護へと変る。そこでの新旧キリスト教の役割が実証的にのべられる。病院と看護婦養成の密着度やカリキュラム変化で変る看護婦宿舎の建築物の象徴性など確かな指摘に教えられた。第Ⅱ部は多様な、高級・大衆文学と看護についての論及。第Ⅲ部は今日的な看護問題の鋭い指摘と批判に満ちていて誠に刺戟的。刊行を深く感謝したい。

（坂本　玄子）

〔時空出版社：〒112―0002東京都文京区小石川四―一八―三、☎〇三―三八一二―五三一五、一九九七年七月発行、A5判、三一八頁、二、九〇〇円〕

小曽戸洋著

## 『中国医学古典と日本―書誌と伝承―』

わが国では、古来、多くの古医籍が秘蔵伝承され、中国古典医学研究のための一大宝庫となっているが、それらがマイクロ複写による利用や影印刊行によって広く一般に流布するようになったのは、ようやく一九七〇年代半ば以降のことである。本書の著者・小曽戸洋氏はこうした研究環境の熟成を踏まえ、一九七〇年代後半から善本医書の本格的研究を精力的に行ってきた。本書は、著者が二十年余の研究過程で発表した数多くの論文の中から、中国古典医学についてのそれを

選び、再編改稿してなったものである。

本書は「日中伝統医学の歴史」と題された序章及び「黄帝内経」「神農の書とその崇拝」「張仲景方」「晋〜唐の医学典籍」「敦煌文書および西域出土文書中の医薬文献」の五章と附章「古代中国の医学史料」から構成されている。その内容は、概ね中国医学の基礎をなす唐以前の古典医書について、現存する資料の実見と徹底した調査検討に基づく医史文献学的研究である。特に各文献の版本学的評価の厳密性において、従来の類書の群を抜く。すなわち本書は岡西為人の『宋以前医籍考』や『中国医書本草考』に象徴されるところの、医書についての正統的な書誌文献学の延長線上に位置づけられる。私たちは本書の通読により、岡西氏以降に展開された中国医書の書誌的研究の、現時点における最先端に触れることができる。

本書の大きな特徴は、書題が暗示するように、中国古典医書の日本での伝承と版刻、並びに研究史に多くの頁を割いている点にある。日本には平安時代以来、多数の伝承医書が現存している。また近世における新旧の中国医書の重刊や考証的研究の膨大な蓄積は、中国の同時期のそれを陵駕している。そこで、日本における中国医学伝承の問題は、独り日本の国内問題に留まらない普遍的側面を持つことになる。本書でこの問題が特に詳細に考証される所以である。

テーマ別では、医経を扱った第一章の「黄帝内経」と第四章の「晋〜唐の医学典籍」に多くの力が注がれている。経方を論じた第三章は他章に比して短編であるが、これはテーマが著者と共同研究者との分担研究となっているためかもしれない。また第二章は他の章と趣を異にし、医薬の祖・神農への日本での崇拝の歴史について述べられている。なお鍼灸専門資料の研究は『黄帝内経明堂』のみで、本書の領域内である『難経』や『甲乙経』はとりあげられていない。

本書は中国医学の医史文献学的研究書として一級のものであるが、それだけでは収録された諸論文から感じる独特の刺激的な要素を説明できないように思われる。そこで著者の文献研究の意義につき、いささかの感想を述べてみる。

中国医学を論じる場合、古典文献の読み取りは不可欠である。しかし、近代以降に成立した中国医学研究書のなかには、古典文献に依拠して〈中国医学の実相〉を論じているような体裁をとりつつも、むしろそれとはかけ離れた、ある種の先験的な〈理念〉に強く彩られている場合が少なくない。換言すれば、今世紀の三十年代以降に日中で復興された伝統医学の諸分野では、復興前後に形成されたところの、根拠が曖昧で主観的な多くの〈言説〉や〈意味〉が、ほとんど再検討も吟味されることもないままに、現在も私たちを覆いつくしている。本書の著者の仕事の本質は、それら既成の〈言説〉や〈意味〉の徹底した解体と、中国医学研究の確実な基礎の新たな構築にあると思われる。その場合、既成の〈言説〉を拒否して直接に古典文献につくことは勿論であるが、本当の難問は、確実な基盤の確立、あたかも〈物質〉を扱うように扱

うことのできる基本的研究対象の確立にある。おそらくこれが、本書の著者が従来の研究者のように無造作に〈内容〉検討に立ち入ろうとせず、先ず〈物質〉としての文献の研究、書誌学についたことの理由である。また〈内容〉を扱う際にも、文献に見える言葉をひとつの〈物質〉を扱うように、文字どおり定量定性的に解析することからはじめている。その典型的な作業として、たとえば本書では割愛されているが、一九八一年に刊行された『東洋医学善本叢書』所収の「『脈経』総説」の後半をあげることができる。筆者には、こうした方法の徹底が〈内容〉検討に至る不可避の過程と考えられたに相違ない。私たちもまた、著者の一連の作業を、中国医学研究を〈文学〉から〈科学〉に転じさせようとする試みとして高く評価してきた。

私たちは、本書の刊行によって中国古典医学考究のための最も信頼すべき研究書を得ることとなった。著者若年時における漢文学習の素養から来たとみられる文体は硬質かつ端正である。今後、本書が研究者必備の一本となるであろうことを疑わない。

（篠原　孝市）

〔塙書房：〒113―0033東京都文京区本郷六丁目八―一六、☎〇三―三八一二―五八二一、一九九六年二月発行、A5判・函入り、七一六頁、本体価格一二〇〇〇円〕

## タイモン・スクリーチ著、高山宏訳『江戸の身体を開く』

本書はタイトルからして一見、江戸時代の解剖学史のように思えるが、そうした従来の著述とはおよそ趣が異なる。一言で本書の性格を表現するのはとてもむつかしいが、いくつかのキーワードがあるように思えた。

ヨーロッパと日本、美術史と絵解き、図像学（イコノグラフィー）と文献学、刀と鋏、解剖医と画家と彫り師、身体地理学、解体図と風景画などなど。

こうした様々な視点から、目もくらむほどの多量の図版と文献を博引・比較し、江戸の身体観と解体図の関連をまさに解剖し、解明してゆく。医史学関連書としてはまったく斬新な書といっていい。以下の目次を見るだけでも視点のユニークさが分かるだろう。

序章は「アクセスの図像学」。第一章「刀」は、「人斬りは、もはや時代遅れ」「人々は刀に異国を見た」「鋏、花、そして人体」「舶来の鋏」「ブルータルな魅力」「箱と折りたたみナイフと」からなる。第二章「身体を切る」は、「外科と外科道具」「オランダ医学」「切る医者」の各篇。第三章「さらされる身体」は、「人間は一個のプロセス」「西洋の絵のインパクト」「彼らは本当に切ったのだろうか」「解剖と権力」の各篇。第四章「つくられていく身体」は、「骨のある話」「内外真偽、それが条件次第也」「食物合戦のメタフォリス」「オランダ料